



医療レジリエンス 医学アカデミアの社会的責任

福原 俊一 編集代表

B5 頁144 2015年

本体 2,800円+税

[ISBN978-4-260-02147-0] 医学書院刊

評者 安藤 潔

東海大学教授・血液・腫瘍内科

われわれが医療現場で経験している過去10年のさまざまな変化が、どのような原因によるものなのか？それは日本における特殊な変化なのか、世界共通のものなのか？これらの変化にわれわれは今後どのように対応してゆけばよいのか？そのために医学アカデミアが果たす役割は何か？

このような疑問を持つ読者にとって、本書は絶好のオリエンテーションを与えてくれるであろう。「超高齢社会」「健康格差」「福島原発事故」「グローバルヘルス」「ビッグデータ」「医療技術評価」「コンパクトシティ」「ソーシャルキャピタル」「総合診療専門医」などのテーマが本書で扱われている。

すなわち現在われわれが直面しているこれらの問題はいずれも近代のパラダイムの帰結としてもたらされたものであり、先進国共通の課題でもある。わが国の医療制度が優れていることは、さまざまな指標における国際間比較でも明らかであるのに、なぜ日本がこれらの問題に直面しているのか。恐らく、最も近代医学に適応した制度であるがゆえに、と答えることも可能である。

したがって、今後われわれがどのようにこれらの難問をクリアしていくのか世界中の注目を集めている。

そのためのキーワードが本書のタイトルにもなっている「レジリエンス(折れない力)」であり、高齢化、疾病構造の変化、経済状況の変化など、時間と共に変化する課題に対してヘルスシステムが柔軟に 대응する力が今必要とされている。「医学モデル」から「生活モデル」へのパラダイムシフトが要請されているが、医学モデル自体も「ビッグデータ」「医療技術評価」を活用しつつ進化しなければならない。生活モデルの実現のために「コンパクトシティ」「ソーシャルキャピタル」などに注目が集まっている。そしてこれらを統合した新たなヘルスシステムの構築のための「究極の医学研究」を実行し、それを実践する担い手としての総合診療専門医の養成こそが医学アカデミアの社会的責任である。

本書はもともと World Health Summit Regional Meeting Asia, Kyoto 2015(世界健康サミット京都会議2015)の開催に向けて準備され、会長を務められた福原俊一先生(京都大学教授・医療疫学)と海外からの招待講演者へのインタビューと会議で扱われるトピックから構成されている。サミットに参加できなかった私のような読者にとっては、貴重な記録となっている。